

柔軟な進化を目指して

総合研究大学院大学長

小 平 桂 一

岡崎の地に基礎生物学研究所と生理学研究所が生物科学総合研究機構として誕生したのが 1977 年 5 月、分子科学研究所が生まれた翌々年、と伺っています。1981 年にはそれら 3 研究所が岡崎国立共同研究機構を形成し、さらに 2004 年 4 月には、大学共同利用機関の法人化に伴って、岡崎以外の地にある 2 研究機関と共に自然科学研究機構を構成することになりました。創立時に既に両研究所を跨ぐ総合的な研究を謳って発足して以来の 30 年の歩みは、次々により広い学問分野との関係を可能とする枠組みへの発展の歴史とも言えます。それはとりもなおさず、両研究所の研究分野が、過去 30 年間の生命科学全般の目覚ましい進展の中で、様々な学問分野に大きな影響を及ぼすようになったからに他なりません。このことは、両研究所の研究成果が世界的に高く評価され、多くの所属研究者が名誉ある賞に輝いていることにも伺えます。岡崎には、学術連係の象徴として統合バイオサイエンス・センターが生まれ、今後さらに自然科学研究機構内での研究連係が期待されています。

また、そうした学問的背景の下に、両研究所は分子科学研究所と共に、総合研究大学院大学の創設においても積極的、中枢的な役割を演じ、大学の創設準備室も岡崎国立共同研究機構内に置かれました。総合研究大学院大学が 1988 年 10 月に創設されると、両研究所に基盤を置く分子生物機構論専攻（現在の基礎生物学専攻）と生理科学専攻は、国立遺伝学研究所の遺伝学専攻とともに、我が国最大の規模を誇る生命科学研究科を形成し、独自の博士課程大学院教育にも取り組み始めました。この研究科からは多くの優れた人材を輩出してきましたが、2004 年 4 月には、他の研究科に先立って 5 年一貫制博士課程の導入に踏み切り、年を追ってその利点を活かしたカリキュラムを工夫してきました。隔年に開催される 3 専攻共催の大同合同セミナーは、参加する教員の幅の広さと数の多さで、学生達にも教員達にも圧倒的な人気があります。また、他研究科に先駆けて研究科全専攻共通科目を開講し、いくつもの新たな講義を遠隔授業向きに整備してきました。総合研究大学院大学の他の研究科・専攻においても、これらの実績を参考にして、大学共同利用機関の持つ豊富で優れた人的・物的資源を活かした博士課程教育を目指して努力しています。両研究所の教員の中には、1997 年 4 月に総合研究大学院大学本部の在る神奈川県葉山に先導科学研究科が開設されてから、この新研究科の教育をも担ってこられた方々が少なくありません。

この誌面をお借りして、両研究所の長年に亘る総合研究大学院大学の担い手としての貢献に対して、大きな敬意と深い感謝の意を表させていただきます。

創設以来 30 年が経って、両研究所が関わる学問分野は大きな変貌を遂げつつあります。とりわけ、学術基礎研究と産業医学応用とが短絡されうる状況が顕在化して来ました。今後の研究発展には後者

を視野に入れた、しかし、学術研究の本質を踏まえた新たな展開を期待しています。大学共同利用機関として、コミュニティの意見を汲み上げながらも、現存コミュニティのみに囚われない、柔軟な「進化」を遂げられるように祈っております。